

個人文書群の目録編成に関する研究

小野増平文書と馬場重徳文書の比較を通して

The Arrangement of Personal Archives

A Comparative study of Ono Masuhei archives and Baba Shigenori archives

恩田 怜

Satoru ONDA

茨城県立常陸大宮高等学校

Hitachiohmiya high school

概要：本研究の目的は個人文書群の編成を通してその諸課題を明らかにし、個人文書群の整理論の中の編成に関わる理論の構築に資することである。研究対象として、小野増平文書（1,298 点）と馬場重徳文書（783 件）の中のカード群（133 件）を選定した。構造分析の結果、小野増平文書は経歴を基準に編成可能であるが、馬場重徳文書は経歴を横断した活動により編成を行う必要性が示唆された。

キーワード：個人文書群、目録編成、小野増平文書、馬場重徳文書、構造分析、組織性

1.はじめに

1.1.定義

個人文書群とは、一個人に帰属するものであり、個人がその活動のなかで作成または収受し、蓄積した文書群である¹。歴史的・文化的価値を有するものとして文書館等で保存公開されている例もある。編成とは、文書群が本来有する構造を把握し、その再構成を行うというプロセスであり²、目録を作成する過程の一段階に位置づけられる。

1.2.背景と先行研究

文書群の整理原則の 1 つに出所原則がある。出所原則とは、資料をそれを作成ないし授受してきた機関・団体・家・個人ごとの文書群としてとらえ、ひとつの出所をもつ文書群は整理にあたって他の出所をもつ文書群と混同されてはならないという原則である³。図書館の NDC 分類は、一文書をその分類項目の中に位置づけてしまうため、1960 年代後半から文書群の出所を混同し文書相互の関係性を壊してしまうと批判されてきた。文書群の編成についての主な議論は 2 つあり、1 つは国際文書館評議会（ICA：International Council on Archives）が提示した国際標準記録史料記述一般原則（ISAD(G)：General International Standard Archival Description）による組織を基盤とした編成であり、もう 1 つはシリーズ・システムによる機能を基盤とした編成である⁴。前者はフォンド、サブ・フォンド、シリーズ、サブ・シリーズという階層構造をすべての文書群がもつことを前提にして、作成母体の組織構造をそれに適用させて構造把

握を行う。後者は前者において作成母体が頻繁な組織改変を経験している場合を問題視して、組織を横断して機能（業務）によって文書群をグルーピングするという方法である。2014 年加藤聖文は、役職または経歴をシリーズまたはサブ・シリーズに設定することで、階層構造に基づく個人文書の編成は可能であるとした。しかし、このような事例研究は、少数にとどまっており、個人文書の編成に関する理論の構築には、さらなる編成事例の研究が必要である⁵。

1.3. 目的

本研究の目的は、アーカイブズ学の編成論を適用した個人文書群の編成を通して、個人文書群に特徴的な編成に関する諸課題を明らかにすることで、個人文書群の整理論における編成理論の構築に資することである。

1.4. 方法と対象

小野増平文書、馬場重徳文書という 2 つの個人文書群を対象に階層構造ベースの経歴（役職）によるシリーズ設定を適用して編成を試み、各個人文書群の構造に適合的な編成の基準を検討する。

研究対象とする文書群は、①広島大学文書館所蔵の「小野増平関係文書」、②筑波大学図書館情報メディア系所蔵の「馬場重徳文書」の 2 つである。小野増平（1947-2011）は 1970 年中国新聞社入社後、編集局報道部、ニューヨーク支局長、呉支社編集部長、編集局長などを務めた。①は合計 1,296 点の記事執筆関係の文書群である。馬場重徳（1909-1993）は 1934 年古河電工入社、退職後内閣技術院事務嘱託を経て大学図書館行政に携わり、1965 年図書館短期大学教授に就任した。②は合計 2,484 件の文書群であり、ドキュメンテーション研究の基礎資料である 133 件のカード群を含んでいる。

2. 結果

2.1. 小野増平文書の編成

2015 年 3 月に刊行された『小野増平関係文書目録』⁶によると、文書群は、形態別に 8 つに編成されており、文書群の構造を反映したものになっていない（表 1 参照）。そのため、各分類項目に構造分析を行い、それらを併せて全体の構造として再編成を試みた（図 1 参照）。

シリーズ設定においては、文書群の残存状態を鑑み、10 の部局＋役職名をシリーズとして設定した。呉支社編集部以前に作成された文書は確認できなかったため、それ以前の役職をシリーズ設定しなかった。また昭和 60 年編集局報道部課長格以前の報道部時代と、NY から帰国後の編集局報道部次長になるまでの報道部時代の文書は、少数かつほとんどが書簡であり、独立編成項目としては設定しなかった。部局＋役職名の下に「移民」など連載や「取材」といった活動をおくことで、例えば NY 支局長時代に「移民」という連載の執筆過程で生成・蓄積された一連の文書群の秩序を再構成することが可能になった。

表 1. 『小野増平関係文書目録』の分類項目

分類	点数	分類	点数
書類	560	電磁文書等	261
ノート・メモ等	90	写真	131
スクラップ	62	書籍	106
書簡	61	雑（物品等）	27

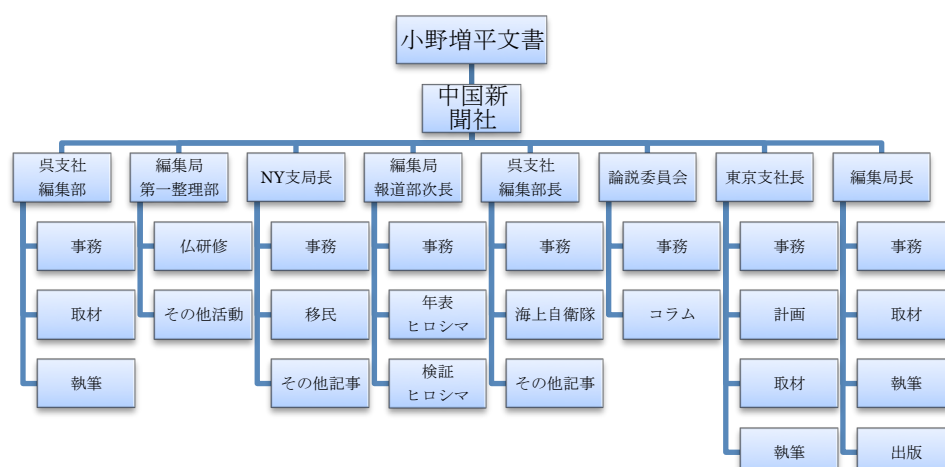


図 1. 小野増平文書の編成（一部省略）

2.2.馬場重徳文書

馬場重徳文書の全体像は図 2 のとおりであり、このうち馬場と生前に親交の深かった図書館情報大学名誉教授佐藤隆司の自宅に保管されていたものの中からカード群を分析対象とした。カードは、8×13cm の規格であり、32×39×10cm（縦×横×高さ）の 133 箱（紙箱や段ボール箱や木箱）にすきまなく並べられていた。カードの内容としては、書誌カードや用語カードなどがあり、研究の参考文献や分析に作成・利用されたものであった。

カード群をその生成・蓄積過程を考慮して、構造分析の結果は下記のとおりである（図 3 参照）。カードに書かれている情報は、大きく分けて「書籍」と「ことば」である。「書籍」は、第 1 に「言語学」、横断領域など主題を基準に取る編成を行うことができ、第 2 に辞書、図書などの資料種を基準として編成することができた。「言語」は第 1 に、記載の言語を基準として分け、第 2 に使われ方（機能）を基準にして、用語編纂、用語抽出に分けることができた。また第 3 にどの媒体から参照したか（情報源）、第 4 に書かれている内容を基準に編成を行うことができた。

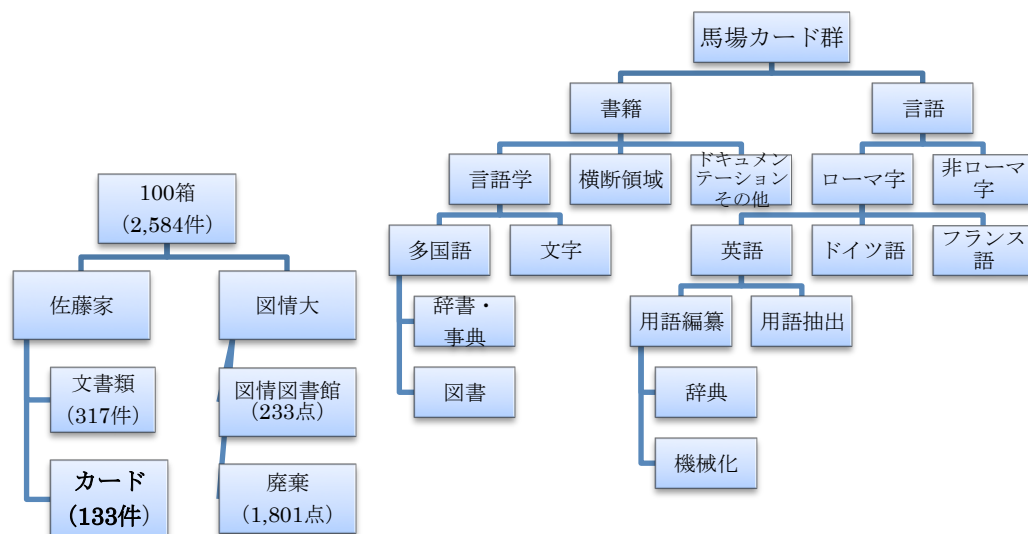


図 2. 馬場重徳文書の全体像

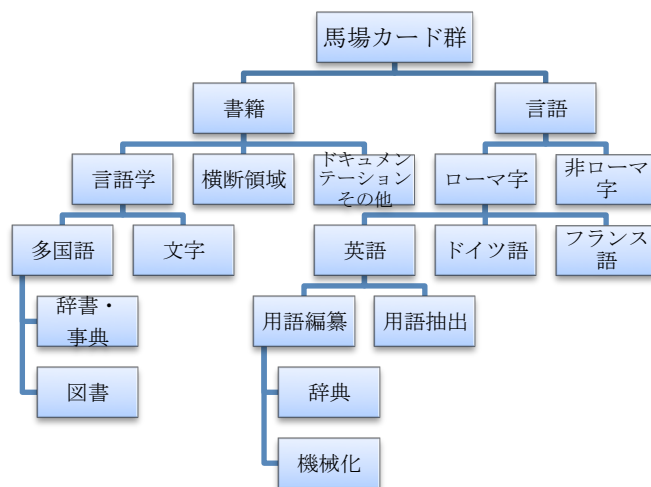


図 3. 馬場重徳文書のカード群の構造（一部省略）

3. 考察

小野増平が勤めた中国新聞社では、部局、役職によりそれぞれ業務内容は規定されているため、役職によって生成・蓄積される文書群の秩序は異なる。そのため、加藤聖文が論じた経歴による編成を行うことにより、文書群が本来持っている体系的な秩序を復元することが可能である。

文書群が役職によって変化した小野増平とは対照的に、馬場重徳は生涯にわたってドキュメンテーションという研究テーマを追求した。そのため研究の基礎資料であったカード群には、役職を超えた継続性のある構造が確認され、経歴による編成はカード群の構造を壊してしまう危険性があった。言い換えれば小野増平文書群は、組織構造が反映されているため階層構造による把握が可能であり、馬場重徳文書群は組織を横断した業務による構造を有しているため、シリーズ・システムによる把握が可能である。

謝辞：本研究は 2014 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「21 世紀図書館情報専門職養成研究基盤アーカイブ構築：図書館情報専門職の再検討」の成果の一部である。

¹ 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修『文書館用語集』 大阪大学出版会，1997 年

小川千代子・高橋実・大西愛編『アーカイブズ事典』 大阪大学出版会，2003 年，p.14

² 図書館情報学ハンドブック編集委員会編『図書館情報学ハンドブック第 2 版』 丸善株式会社，1999 年，p.527

³ 安藤正人著「第三章 資料の整理と検索手段の作成」国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』 岩波書店，1988 年，p.56

⁴ 坂口貴弘著「アーカイブズの編成・記述とメタデータ」『情報の科学と技術』60 巻 9 号 情報科学技術協会，2010 年，pp.384-389

⁵ 加藤聖文著「近現代個人文書の特性と編成記述」 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造と編成記述』 思文閣出版，2014 年，pp.181-199

⁶ 『小野増平関係文書目録』 広島大学文書館，2015 年